

地域貢献活動から新たな研究シーズを開拓

福山大学 薬学部薬学科 病態生理・ゲノム機能学研究室
教授 道原明宏

福山大学に通う多くの学生が暮らす松永町は、山と海に恵まれた自然豊かな地域である。下駄作りが盛んで現在も全国生産量の約60%を占めている。福山大学は桜の名所でもあり、3月末から4月上旬にかけて、高齢者や園児がお弁当をもって花見に来る。そういった風景を30年以上見てきた。近年、11階建ての新棟



お花見シーズンの福山大学

が建ち、研究や執筆で疲れた目を11階からの眺めで癒すのが小生の日課となっている。そんなある日、郷里・大学の研究室・誕生日が小生と同じである薬剤師の友人から突然、カフェを手伝ってほしいとの連絡を受けた。カフェといってもスターバックスのような喫茶店の類ではなく、認知症者やその介護者等が楽しい一時を過ごしたり、認知症について語り合ったりする認知症カフェの運営・企画の手伝いであった。友人曰く、若者との交流の場が高齢者に活力を与えることから、学生ボランティアの立ち上げに協力してほしいと切実に懇願された。地域貢献も大学教員の責務と捉え、友人の誘いを受け平成29年から認知症カフェ(cafeGETA:下駄作りの土地柄が所以)の運営に尽力している。

研究室の学生に声をかけたところ有志が集まり、福山大学薬学部学生ボランティアグループ「和ごころ」が結成され、月1で開催のcafeGETAに参加している。小生も時々、学生に交じって参加者と何気ない会話を楽しんでいる。当初、このcafeGETAの主軸目標は認知症者の交流であると考えていたが、介護者(家族)にとっても重要な場所であることが分かってきた。家族の多くは介護に疲れ、認知症者以外の他者との交流や気分転換できる場所を望んでいた。また、優しい介護を維持するために、自身の健康や認知症を含む疾病予防・治療に対して強い関心を持っていた。認知症者の活力増進も大事であるが、介護側の健康維持も確かに重要であると痛感した。

○目次

巻頭言P1
理事会報告P2
お知らせP4



研究室のメンバー（前列左：道原）

介護者のニーズに応えるため、年2回程度 cafeGETA において、和ごころメンバー等と認知症予防に関する内容を発表している。学生と共に教科書や文献・ネットを検索しながら正しい知識を修得していくことは小生にとって楽しい一時である。しかし、それを一般市民に分かりやすく短時間で正確に伝えていくのは、なかなか難しい作業である。資料作りを視野に入れ参加者と積極的に会話をしていく中、多くの方は難しいメカニズムよりも飲食で予防できる情報を求めていた。そこで、疫学データに基づき抗酸化物質を含む食材、認知症予防に繋がる食材、睡眠と認知症の

関係等について、イラスト(手作りの絵)を用いながら説明している。また、認知症の原因として脳血管疾患(高血圧・脂質異常など)も影響していることから、これらの予防も重要であることを発表している。発表後は必ず参加者から何かしらの質問が来る。中でもコレステロール(Chol)は認知症にとって良いのか悪いのかという質問は小生を苦しめた。高ければ動脈硬化、低ければ脳内出血や総死亡率の増加を招く。中庸が良いことは分かっているが、小生への新たな課題が生まれた瞬間である。課題の解決を求め基礎研究を始めた結果、ステロイド類縁体(Cholを含む)をリガンドとする転写因子(ROR α)が、酵素(CYP39A1)を増加させ、アルツハイマー型ならびに血管性認知症に関与する物質(24S-ヒドロキシ Chol:神経毒性を有する BBB 通過 Chol)の減少に寄与する可能性を導き出した。つまり、Cholが認知症の予防に繋がる可能性が示されたのである。課題の証明は今後も続けていく予定である。最近、研究を続ければ続ける程、Cholの多機能について驚かされると共に、学位論文の題材である Chol から縁の切れない人生であることを心に強く感じる。

地域貢献の一環として協力し始めた認知症カフェは、小生にとって新たな研究シーズの開拓の場所になっただけでなく、予防・治療の一助に貢献したい想いを取り戻すきっかけを作ってくれた。外に出て色々な人と関わることも今後の研究者人生にとって大事なこともなのかもしれない。余談になるが、令和4年6月の認知症ケア学会で発表した演題が石崎賞に選ばれた(12月)。学生と活動し内容を論文(認知症ケア事例ジャーナル3編、社会薬学2編、日本健康医学会雑誌1編)にしてきたことも1つの基準になったと予想される。この場を借りて学生たちに感謝の気持ちを述べる。ベンチからベットサイド(基礎から臨床)へ繋がる研究を夢見ながら、今後の研究者人生も謳歌していきたい。



11階建ての新棟